



# なかましんぶん

H31年5月1日 VOL98 小川和代



新生活も1ヶ月経つと、3月までのことが遠い昔のことのような気がしますね。大きくなるという期待は、現実のものとなって、当たり前の日常へと落ち着いていきます。特に3月から4月への成長は目を見張るものがありますね。そして、新1年生を見送った新年長さん達は、もうしっかり来年の4月を見据えています。「お母さんは、今年が終わっても1年生になれないんだよね」なにか、母を憐れむようなつぶやき・・・このつぶやきに1年生になる事への期待感があふれています。そして、その行間に、今年の遠足、縁日、運動会・・・が終わったらという今年のやる気も伝わってきます。今月は、最初の行事「親子遠足」があります。保護者の皆様同士や保育者と、大人同士の親睦を深めることも目的となっています。楽しい一日を過ごしましょうね！！

## かけがえのないもの

ライオンキングの大好きなシーンで（シンバ）「お父さんは怖いものなんてないでしょ？」（父）「あるさ、お前を失う事」細かくは覚えていないのですが、こんな意味のセリフがあります。親は自分の命を失う事より、子の命を失う事のほうが恐ろしいものですよね。そしてこれ以上に恐ろしいことは他にないと思います。だからこそ、目の前に確認できないと、心配で居ても立っても居られないものです。一方、子どもの方は怖いものなし、無鉄砲にさえ見えます。自分の力を信じて、試してみたいのです。

親に何も伝えずにこどもが居なくなってしまい探し回っていた時（メールメイトで一報を送りました）は、心配でおろおろするばかり、見つかった時には、安堵もつかの間・・・「何してるの！！」と怒りに変化します。見つけた時「だいじょうぶだよ～」と言って自分の大冒険を自慢したいくらいの子どもの表情に、「大丈夫なわけないでしょ！！」と怒りをぶつけ、帰ってから考えてみました。

大人の怒りは、「失う恐怖」から、こどもの「だいじょうぶ」は自分への信頼感。大人は、「やっていいこと悪いことの区別がつかないの？」って自分の心を弁護して正当化します。実は、こどもは、大冒険の物語を大人に話したかったかも・・・「自分で出来た！」英雄の気分を味わいたかったかも・・・良く考えたら、本当にその大冒険を何の不安もなく楽しんでやってのけてたのだから・・・。そんなことができるはずないと、大人が勝手に決めてしまっているのかも・・・。

ともかくにも、もちろん、これは由々しき事態。何かが起こらなかつたのは不幸中の幸いなことであり、しかるべきあり方を子どもと再確認しておかなくてはならない。というのは間違いのないことなのですが、この出来事を通じて「こどもを信用していない自分自身」を再確認しました。そう、親（先生）と言う性は、たとえこどもが大人になっても、心配しないでいられない、「失う恐怖」の呪縛から解放たれないのかもしれない。それで、こどもが目の前に確認できない時、大きくなったらなつたで、こどもが自分の範疇を超えている時に、心配で居ても立っても居られない。そして、こどもの方はいつでも、どんなことでも自分の力を信じて、試してみたい。親の心、子知らず。子の心、親知らず？親と子の間にしか流れない、この心持の葛藤は、お互いがお互いをかけがえのない存在としている証なのかもしれないですね。

世界中のどこを探しても、親ほど子を心配する存在は無く、実は、子ほど親を心配してくれる存在もないことでしょう。なのに、親だけが心配している立場を主張してるのかも。意外に子どもは謙虚なのです。もしかしたら、どんな場合にも子どもの力を信じて、応援するのは素敵なことなのかもしれませんね。たとえ、それが失敗しても、学びはかけがえのない宝になるはず。

やっぱり心配なので、命の尊さはしっかり教えなくては！（堂々巡り・・・(-\_-;)）いえいえ、命の尊さを実感したのは、大切な存在がいてこそ・・・こちらが教わつたのかもしれないですね。小さな命はいつも私達に大切な事を教えてくれますね。一緒に、必死で探してくださつたお母さん、お父さんがた、ありがとうございました！！